

# ミオヤの光 至心の巻

清き情操	一	如来の体相	二二三
信と愛と欲	五	妙法	二二四
愛慕	九	四智の光	二二五
至心欲生の念	一	三徳の光	二二七
名号仏種子	一	三摩耶の花	二二九
大我と小我	一三	感情美化の光	三〇〇
顛倒の夢想	一六	日々の糧	三三三
宗教生活の依處	一七	仏の大慈悲	三四
大我	一九	光明獲得	三六
慈父	二一		

## 清き情操

一大事の安心につきては先第一に宇宙に唯一のミオヤの外に全幅を献げて歸命信賴すべき御方は無きことを決心す。實に唯一の大ミオヤの外に我を攝受して諸佛同體の佛位と爲し玉はる御方は在りませぬ。

安心と云ふ信仰の決心が大事です。

あなたには此安心の情操が立ちますか。

如來よアナタの外に私を攝受して御救濟下さる御方は決して在りませぬ、故に私は生命を献げてアナタに歸命信賴申上ります。已にアナタに献げた命のことなれば縱令生命にかはる事情が起らうとも決して他の神や佛に祈誓する様な事はいたしません。

アナタの外に私の命を献ぐる御方は在りませぬ。アナタの外に私の魂を献ぐる方は在りませぬ。アナタの外に胸の底を明して御頼申す御方は在りませぬと云ふいかな

る事情の爲にも決して動かぬ信の情操こそ、實に清き心なり。

永遠に活ける心靈は已に如來と結婚したのである。貞婦兩夫に見えず、いかなる事情の下にもいかなる誘惑にも決して此靈的貞操を破損する事はない。また宇宙唯一の君を措きて他に意をよせる要はない。

或深窓の下に育ちし窈窕なる淑女があつた。安心の堅固なる信仰の眞操實に其操の清きこと比ぶるものなし。重患に罹つて醫藥悉く盡せども効なく已に危篤に瀕す。時に法華の験者あり。之を聞いて大に悦び、即ち往て其の父母に勸むるに娘の爲に法華を信せよ忽ちに平癒すべしと。父母大に悦び之を女に告ぐ。女曰くあゝ我父母よ、

是の如きの大事に臨んで今尙惑ひ玉ふか。若し我如來の慈悲の御手を離れて法華に歸せば神識永く闇黒に墮せん。我生命は即ち如來の有たり。此土に在るも淨土に生るも如來の聖意による。若し法華を信じて天死なきやを識らんとせば、法華宗の靈地に早世天死なきや否やを檢し玉へ。心靈を救ふ妙法を唯糊口の糧と爲す。憎しと云ふよりは寧ろ憐むべき徒なり。即ち今幸にして如來に自己をささぐ。

オ、如來我を試み玉ふか。アナタを措きて私何をか憑まん。私は益アナタを慕ふ。私は此土に在るも淨土に在るも永遠不死の生命なれば此外に生命を云々する信心の要あるをしらず。ア、如來よ、慈悲のミオヤよアナタは法華僧を使はして私を試み玉ふ。我が金剛の信心は決して法華僧の死を以て割ることは出来ぬと。

ア、清き操よ、此操こそ永遠に如來と離れざる結婚なり。

靈は已に如來と結婚式を擧げた。アナタと永遠に離れることのない仲と爲つた。此れに就いて思當るのは、タゴールの閨室の王の説に、私は王妃と爲つて已に久しいけれども、未だ一度も配偶者たる王の姿を親しく祝たことはない。王様は全體美しい御方か。醜い御方か。どうも親面した事がないから自ら分らないと。今私も昔はタ

ゴールのと同じ様な經歷をたどつた経験がある。如來と割なき仲と爲つては居るものゝ、親しく慈悲の面に接せざりし程は、朦朧と雲井はるかに憧憬るゝものゝ、その間にまた雲の満てるありて何時かこの満るを去りてさやけき月を見ま欲しさ。

昔慧心院僧都の實験より現された雲中の彌陀の聖影瞻仰するにも僧都の親觀せしその如くに我もまた而見の口のあれかしと逢坂の關のゆるされぬことを憾みし、宇宙に充滿する程のアナタの無限に廣き聖胸の程を、淺ましき我身の悲しさ折々は雲井遙かのアナタに歎息をして、聖者善導または聖者源信等の賢士なればこそ、月下らず水上らずして感應道交して寝る夜の床にも靈界の美人は通ひなされて離れぬ隙はなしと物されしよ。私ごときを卑みて聖意をかけまさぬかや情なや。かゝる片おもひ何ぞ我をば嫌ひ忌み玉ふぞと己が業障の深重なるを忘れ、還つてアナタをお憾み申したることもありき。

## 信と愛と欲

太陽の光を外にしては月輪の明りはない、月は太陽の光の映寫

彌陀の光明を離れて觀音の聖徳はない。觀音の人格に輝く聖徳は即ち彌陀の靈光である。太陽の方は天に照り亘るも月輪がなければ光明を現はすことできぬ。彌陀の靈光は法界に徧照すとも觀音の人格なければ示現ができぬ。彌陀と觀音との關係は相互に離れぬものである。

相互の關係はいか様に結合されてあるかを三面から、彌陀は聖子たる觀音を生産養成する聖意を恣やうに示されて居る。

佛子 至心に我を信じ我を愛し我國に生れんと欲して一心に念せよ然る時即ち聖き人に生れ更らん。

然れば即ち如來は已に萬徳圓滿して聖子を養成さるゝ靈力は充ちみちてをる。聖子

の徳を養成せんとするには至誠心でなければならぬ。

觀音のやうな花のやうな光ある力ある圓滿な完全な品性は人格は如何にして形成せられたのでせう、其人格の實質内容はいかに豐饒でせう、其光輝ある品性圓滿なる人格、精神にいかなる滋養分を攝取してをるでせう。

寶冠にいただける寶石あらゆる寶の瓔珞真珠また胸にかかれる寶石真珠等の瓔珞は其價千金、あらゆる品性と人格とを以て莊嚴せるすべての精神生活の豐富なる理想の高尙なる希望の遠大なる實に雲中に光彩を放てる淨滿月の如きの人格である。

其の皎潔たる滿月の如くに輝く人格には其内容に太陽の如くに光明の原動力がなくてはならぬ。

觀音てふ靈的人格の背景には彌陀てふ太陽の靈格ありて其の光明の反映を觀音に及ぼしてをる。

彌陀の太陽と觀音との關係には信と愛と望とある。

觀音の心には彌陀を最尊第一なる威神光明者神聖なる靈者として彌陀を歸命信願してをる。彌陀を絶對的本尊として彌陀を奉戴してをる。すべてを捧げて全心全幅を捧げて彌陀を信奉してをる。

之を仰げば彌々高く之を鑽れば益堅き如來として尊敬してをる。

宗教心。宗とは絶對的に尊き格に歸命信願するのが宗教とすれば實に觀音は無上の尊敬を以て彌陀を奉戴してをる。

信心から信仰する時は實に彌陀ほど高遠にして尊き格は在りませぬ。宗教の信心の本尊に對する信仰ほど客體を尊敬し崇拜して自己と彼との距離は非常に間隔を爲してをる。尊崇恭敬の位が進めばすゝむほど本尊が高くと遠くあなたに崇めて頂禮する。

若し此の尊崇恭敬の念が無ければ宗教心とはならぬ。

あなたが高く崇むほど自己は卑下し謙遜す。

あなたの光明、ますます、明照せらるゝに自己の罪惡であり卑劣なる物の數ならぬは

どが感じらるる。自己が無知無力非靈罪惡なることを自覺するに随つて益々あなた  
神聖最勝無量の靈徳を尊信する念が増長する。信は進むに随つて如來に對する無上の  
尊敬心が増して来る。

次に宗教心の一方に非常に高く遠く尊敬しながら其内容には反對に益々近く親しく  
彼此の間に毫も容るゝ能はざるの感情が起り來る即ち是如來を愛する愛念である。

彌陀はすべてに超えて觀音を愛す。觀音はまたすべてに超えて彌陀を愛樂す。  
愛は増長するに隨つて益々親近す。

信には畏敬尊崇の遠心力あり、愛には愛慕憶念の求心力あり、愛は彌陀は愛を以て  
觀音の血肉まで、子は慈母の胎内に於て養はれ生後には哺乳せられ抱養せらるゝ如く

に、觀音は彌陀の大慈悲に産出され抱養せられたる聖子であると云ふべき實に麗しき  
慈愛に富める其品性の最とも高きは彌陀より養はれたる靈徳である。故に觀音は彌陀

より産出されたる聖子である。産出されたるのみでなく彌陀に養成せられたる法王子  
である。我等が日々現に靈は養はれつゝあるではないか。

信は歸命頂禮恭敬する、高く遠く。  
愛は相互の間に於て増長すれば益々親近する性を持つてをる。相互に結合せる愛の情

は實に溫暖なる熱血の通ふ。之に接近せんとして離れんとするも離るゝ能はざる結合  
である。

母は自己の胎内より暫らく分産したる兒に對して常に温々たる愛を注いでをる。子  
がまだ母より分産されぬ前は相互の間に愛情は起りぬ。彼と此と相待の中に於て常に

離間せざらんとしたる愛である。  
子の愛は益々増長するに隨つて愛情もまた増長して愛の状態に變ずる。

愛慕

靈の愛は暖にして且つ麗はしく、我靈には赫々たる輝ける大靈の麗目に衝動され

て自ら禁じ難きの感じあり。我が大靈のいと暖なる靈氣のなかに我靈の感情は融  
込んでしまふ。春風胎蕩たる和氣に誘致せられて爛漫と笑み初めたる櫻花の如くに大  
靈の無詭の靈に充されたる靈氣に催されて靈の花は咲初めぬ。香はしきこと限りなく  
陽々乎として心の底ひあるを覺えず。

工匠を戀する故にか何處となく耳にちよる音がするとは假諺である、感情の眞  
を穿ちてをる。常に大靈を愛念して戀念内に充つ時はすべての觸目對境として大靈  
を認めざるを得ぬ。赫々たる旭日にも先づ思ひ出ん、火の中水の中萬物の中に於て一  
切に充滿せる神を見る。

聖典に衆生佛を愛念すれば佛も我等を憶念するとある。我胸に念に存在する神は外  
一切萬物の中に在ります。我萬物に超えて尊崇の對象物はいかなる處にも在ざる處な  
い。萬物に存在せる實在を全く眞實の生命ならしむるものは靈の愛より湧出る信念  
である。

太陽は自己より分離したる地球に對して千萬年を通じて愛の力は常に呼を〇して戀  
々として捨ること能はず常に全心の愛を注ぎて地球を暖めて居る。

大靈はすべての靈なる靈を愛して無上の愛を注ぎて在す。經に、如來の慈愛の光は  
遍く念佛の衆生を慈愛を以て攝して捨てずと。

至心欲生の念

欲生は意志の信仰である。一切生物は悉く活んと欲するを目的とし、活さんが爲  
に全力を用ゆ。而して劣等なる物は唯肉に活きるを全生命とす。今至心欲生の念とは、  
無限の光の裡に永遠の生命に生きんと欲望である。最高等の理想即ち彌陀の中に生  
れんと希求また最高等なる人格即ち佛に成らんと願望である。

聖靈曰く、彼の極樂の受樂無間なるを聞て樂を負はる爲に淨土を求むるは不可  
ある、願くば佛に成らんと。

### 名號佛種子

佛種子。名は體を徵す。彌陀萬德を總括包含する種子の名號、彌陀靈の種子。種性に本有と新薰。

本有。佛性法爾と具す、是先天理性。

新薰。名言薰習。八識中に伏在して自體果を生ずる能力、色心萬法を現象する生産起元作用。

例。植物の種子に生産する起元作用ある事、生物の元形質種の細胞に入りて種子と爲り一切の枝葉根莖等が元形質中に依込式に伏在して縁を待て發展す。

桃の果は大い其種の元形。

杉、孔雀、人等元形質に五體五官乃至一切精神

彌陀種子。四智、三身、十力、四無畏、十八不共法等の内證、相好光明、說法利生等一切外用、悉く名號種子に依込式に成て、衆生の心地に播下す。之が種子萌發して成果して宗祖の人格と現はれ、終局は彌陀大靈格と爲るに至らざれば止まぬ。

### 大我と小我

親縁は如來の慈愛と衆生の感情との最親密なる關係なりとし、父と子のまた母と子の關係の如くにして説きぬ。其親和の根本動機は、人の精神中樞なる心情を即ち内容の主人公たる我を以て親愛の中心とす。親密と愛とは心情の主人たる我を彼に投射して之を愛とす。愛は彼に投じたる我なり。其故は若し我てふを外にして愛なるなし。生佛の親縁を異性相愛に例して生佛の感應によりて聖子と更生すべき理を説明せり尙終局の親愛の眞理は能所一體、生佛一致を明して親縁の極至とす。是宗教的關係の終點にして因縁相待の規定を超絶して、衆生の小我と如來の大我とは本來一體にして

如來絶對の大我に融合するを得。

如來と衆生の因縁には衆生本一大法身を根底とす。一大法身の本體を離れて別に衆生心あるに非ず。吾人が知覺運動あるはこの精神なるもの即ち法身なり。この全一法身を體としながら衆生分々にこの身を受け、個個に肉我を執して特殊的に我なりと謂へり。この肉我なるものは物質の規定に着色せられて法身そのまゝを顯現せざるもの、本其中心は法身の分身なりといはざるを得ず。法身は本絶對的本體なり。然れども此肉我の爲に一大法身と我と分別を見るに至りしは全く迷なり。宗教の中に殊に佛教に於て最も嫌ふ處は肉我を執して實有と執するにあり。肉我は本大我を離れて別に實體あるにあらず。

六大假和合の核を捉へて之を實我と謂へり。六大各々其元質に分つときは何の處に實我あらんと、之につきて、肉我、相待我、理想我、眞實我、

肉我はまた機制我といふ。此肉體は諸の物質の原子が聚合し、この身體の組織は悉く機動的器械的に規制せられて運動活用をなす。此機關師をさして我となす。我とは自由の義にして、自己の關する機關を任意に左右するの義、然るに此機關師自由を得る如くに自任するも、其實は生理に規定せられ、因縁に約束せられて自由を得るにあらず唯此機關の運轉を或る範圍内に於て、自由を命ぜられたるなり。主人公すべての機關は我に幸福を興へ、この機關は快樂の器具として我は機關を備へ、快樂の主として満足を得んとす。然るにこの機關なるもの眼に耳に感覺の欲を恣にして、營養も生殖までも悉く快樂の料に供せんとす。春夜の夢を貪つて快樂を貪るにも其目的を誤つ時は、還て苦惱を加へ機關を損ひ、ついに何を計らんや此機制全く快樂の機關にあらざることを。殊に老人の如き快樂を享受すべき器にあらずして寧ろ苦みを受くる器なり。

感情我。我愛執藏など云て人の精神中最も肉につき親しきものは感情なり。情は肉と最親密脳髓血肉及生理機能即ち我を執す。故に此血肉の純深なるは感情の麗しきとおもふばかりに此活氣血肉の活動と伴ふ感情を即我とす。之を愛するは生理の自然にして、自家保存の必要から衝動する愛我なり。

### 顛倒の夢想

人生は快樂を目的とし、世界は幸福の満足せる舞臺との夢想は、事實に望んで現實に支吾し、三苦は人生をめぐりて離れず八苦は交々競ひ起りて隙なし。是人生及び世界を顛倒して觀想せし結果なり。人生の眞意を解し世界の眞義を解し天則の眞理を認識する時に至り始めて、豫想の顛倒なるを覺らん。

世界は幸福のみ與ふる處にあらず、天則は我の爲に變ずべからざるを知らば幸福主義は筆でか其目的を達すべきぞ。焉に於て幸福主義の顛倒をさとり、主義を一轉する時は、理想に於て解脱の觀念を得。

快樂幸福の顛倒を一轉する時、消極的は厭離穢土とす。世界と幸福主義の迷なるを覺する爲なり。

積極には世界及人生は快樂及幸福の爲にあらず克己精進菩薩六度の道なり。布施正義、耐忍、勇敢、慈悲等の、苦惱は解脱に要あり、人苦惱なくば解脱の要なし。

### 宗教生活の依處

世界自身は因果に規定せらる。よりに眞に畢竟の心情の安立處を求めば、宇宙統一の根底たる絶対永恒なる如來に求めざるべからず。罪惡は主我を根本とするが故に、主我自ら主我を脱すべきに非ず。自己の最根底たる自己の心靈即理想我、天然機制の我を超越し其最根底たる絶対の觀念中に眞の我を

發見す。現在我と理想我。理想我は心靈にして一大心靈即ち眞我と一致せる自己の心靈我は即ち大我、之を眞我とす。

機制我は自由を得ず。因果に約束せらる。

理想我は超然として高く機制を離れたるが故に、天則の機定と世界の束縛を離れて生死の表に出て、相待なる善惡を超て絶対なる眞善なり。如來眞我に相應するが故に。

歸命。心情信仰は解脱の恩寵と冥合一致し、恩寵の獲得は即信仰の發得、心情的機能一致、入我々入、最深中心の眞髓なり。

如來に投歸没入して現在我を消極的に没入するを歸命と云ふ。已に歸命しぬる時は機制なきにあらざるも罪惡の根本たる主我已に歸命する時は、機制の罪惡なきにあらざるも主既に歸す、その眷屬何ぞ其命を奉せざらん。天性は主我を主人公として跋扈せり。

融合。如來の恩寵と心情と相應投合す、即ち融合なり。

融合の状態神秘此に理としての融合は、大我小我入我我入三昧致一の狀態。水を海中に投するが如く風中に葉を鼓するが如し。

### 大我

私の根本的本源は何ぞや、自己は自己に身體と精神と二要素より成立し、我この身體を組織する元素は那邊より來りしものぞ。即ち諸の元素の宇宙を離れて從來せる處なく然れば此身體を造る原料は宇宙なりとすれば、宇宙は物質元素の親なり、人に具有の精神に於てもまた然り、宇宙を離れて従り來る處なし。由りて觀れば宇宙は心身兩方の原素にして、また産出せられたるものに衆生個々の我と小我とすれば宇宙は一大精神なり。密教には宇宙の物心二素を合して、全體を人格に表して色心一體の

大日如來と曰ふ。即ち宇宙は即ち是一切智と一切能即ち知力と意志。大日如來は大我なり、衆生は大日の一分なれば悉く是小大日なりといふべし。行者三密加持の感應によりて如來の三密と衆生の三業と相應する時、行者の我は如來の大我に入り如來の大我は衆生の我に入り此彼融合し、自己の心大我に冥合する時は宇宙大なる我には彼此の相貌なく絶對無限にして蕩々乎とし涯畔なし春和融融、

融合、神秘融合の心の状態はたゞ形式的に大自觀念の光明中に觀念的自觀として精神的形式に於て能觀と所觀と一致するのみにあらず内容に於て如來の大我と小我との神秘の感情的融合の状態は其あたゝかに麗はしく、春日の長閑なる和氣にかこまれる暖温なる心情蕩々乎として言ふべからず。

眞我。宗教にては肉我中心を超えて大我を中心とし、大我を眞個の我とす。自己の根……

### 慈父

實は佗人ではなく、我等が本覺の父である。精神を絶對的に其宇宙の靈に活ける父としての中に投じ、暖かなる慈愛に暖められ融込て卵の孵化する如くに始めて心靈の覺醒して見れば、宇宙の本體は唯の自然ではなくて實に大靈に活ける最も慈愛に富めるミオヤである。全くこゝに至て觀れば、假令此形體は小さくも、心靈の内面に於て大なる如來毘盧遮那の光明中に合したる内觀は無限である。此小我と大我との内觀合一は、小我が大我の中に融込で仕舞つてまた無限の大我の無邊の徳は此小我に全く融込で来る、其内觀は實に知見して智のみでなく、融合したる内感の妙味は言語の及ばざる處である。

釋尊が宇宙に對する關係は他の哲學者科學者等が宇宙の實體若くは現象の萬有を學說の材料とし研究の對象と見てをるのとは大に趣を異にしてをる。

科學者は自然法に對しては絶對に服從的である。佛陀は大自然の奧なる大我と自己とは一體と成てをる。大自然と云ても表面より見るやうでなく、絶對の大靈眞如と云ひの永遠に活ける靈としての如から顯はれ來たのが如來である。故に科學者の如く大自の奴隸でなく内面に靈の血脈が通つてをる親子とも云はまた一體とも云へる。究る内面關係に於て哲學者や科學者とは異つてをると云ふ譯である。

宇宙の大秘密藏の如く不思議なるはなし。宇宙は不思議の秘藏である。一切の自然の現象界は悉く秘密藏より發現したるものである。太陽の如き赫々と光を八方に及ぼし、地上の一切の生物の起伏生滅變化 悉く宇宙秘密藏より顯現したるものである。一般の生物又人類に至つても自然の因果の因縁から生産れて居るけれども、大自の内の大靈に暖められて靈に復活せざるが故に、唯自然の奴隸と爲てをるに過ぎぬ。

### 如來の體相

佛教にて心眞如即ち實體の本質は物心無礙、時間空間に超絶して、而も一切の時間と一切の空間とに徧在せる絶對永恒の萬物内存の天心靈態とす。物心不二の故に天心靈態とす。萬物の内に存す、故に内に非ず外にあらすして而も内外に徧在す、絶對の故に物心を統ぶる大靈態とす。華嚴に總該萬有心とは是なり、是即ち宗教語に謂ゆる如來法身の體、毘盧遮那である。密家に謂ゆる地水火風空大の物質、識大の心質とは本、六大無礙の本體之を金胎不二の大日と爲す。是斯教に謂ゆる彌陀の法體とす。一切萬法の本體にして一切生起の一大原因とす。

彌陀の法體は即ち眞如絶對の天心靈態なり、然らば如來の妙色相好身はいかに現じ給ふやとなれば、心靈態は色心不二の靈態にして、其體の上に相あり、相に色相と心

相とあり。如來は宇宙全體、絶對の大靈の故に、其相としては、一面より見れば宇宙全一の大智慧にして智慧は例へば明鏡の如くにて、鏡の明態には男女の色影が現するに鏡は全體明體にして、而も全體色像を現す。

有漏の衆生は物質の身色と無形の心とは無礙を得ざれども、如來の妙相は宇宙全體が即ち大智慧の鏡にて、また處として妙色莊嚴身の現せざる處なし。故に如來は色相を離れたる大智慧態として見るも又妙色相好身を見るも一體の異方現に外ならず。淨土の無比の莊嚴を現するも亦然り、能く此理を會得せざれば大乘の佛身を誦ることも能はず。

華嚴及び起信論等に此説散在す。深く領會すべし。

### 妙法

然ら惟れば天地萬物の行はるゝ一切生物の生成するの理法は實に不思議である。日月星辰は天にかゝり地には一切生物が生存する。火は物を焼き水は潤ほひ眼は視え耳は聴え意は分別する。一切萬物の自然の理法即ち妙法である。此妙法の内性は即ち心である。此心から十法界また世界と衆生及び萬物とも變現す。此心から因縁因果の理法とし衆生を造り六道の身と國土と生死を流轉せしむ之を衆生法と云ふ。衆生の心に眞理の光明を與へて無明を轉じて光明とし、生死を出でて涅槃に入らしむる契機を佛法と云ふ。此心に光明なければ即ち衆生と爲り衆生光明を得れば佛となる。心と衆生と佛とは本來無差別である。即妙法である。

### 四智の光

報身の智慧は心靈美を照す日光である。日光照せば山河大地一切物を明見する如く如來の智慧光を被る時は心靈美の無量の眞理謂ゆる十界三千塵數の眞理などを顯現す。唯識に謂ゆる凡夫衆生の心は阿賴耶識を以て體とす故に闇夜の如く日月の光にて

萬物を見聞するも同じ。世人に在りては人間は人間式に萬物を認識して犬猫は犬猫式に世界を感じて決して決していかに人類の美とし妙とする美術等に對しても彼等には何の價値もなし。人間に人間のアラヤ識(心)を以て現在世界の認識をかやうな物と認めてを

唯識論には衆生の阿賴耶識の轉じて佛の大圓鏡智等の大智慧と爲る時は恰も闇夜より日中に加はりし如く心の世界は一轉して夜明て萬物炳然たる如く十方三世の眞理瞭然として顯現し絶對なる如來の自境界も宛然と知見することができると。唯識にては自己が阿賴耶識を轉じて四智と成て成佛す。今は我ら現在天性の阿賴耶の闇黒が如來の四大智慧の日光に依りて光明界の人と爲るなり。たとひ四智が明かに現はれざるも如來の光明に復活する時に從來は唯人間自己本位に心を安き所を定めたるものが轉じて絶對なる光明如來の四智の光明照り給ふ中の人と更ることが得らる。夜明け日中の如くである。

### 三徳の光

譬は教育が知能開發の知識に對する教育に徳器を成就する修身科ある如く、智徳二育を要す如く、宗教にても如來は四智を以て人の靈性の知見の徳を開き一方には徳育の人格を完成する要あり。天尊の如來が衆生の信仰に對して道徳心を養成する靈光を以て常恒に衆生に儼臨し玉ふ。又譬は如來が四智を以て衆生の知見を明くするは恰も日光の如く信仰者の道徳心を養ふは化學線を以て植物等の果實を成熟せしむる如くで稻實能く熟し良米を收穫するは太陽に力を俟ざるべからざる如く我が靈的人格の圓滿に完成し熟するは如來の光明により化學線の如く人格を養成するは如來の神聖と正義と恩寵の三徳とす。通じて佛教にて報身の三徳を法身、般若、解脱と云ふ。今は宗教故に神聖等の三徳を以て如來の徳を顯す。

法身より分身出産したる我等が心靈を開發し煩惱と云ふ惡質を解脫して人格を靈妙態に成就せしむる如來の徳用あり、此三徳の光を以て報身の天尊は智慧と慈悲と威神の光明赫々として我らに儼臨し玉ふこと嚴父と慈母とが良家の子等に對する如きである。世に嚴父と慈母との缺けたる家庭に放縱に養成せられたる子は決して完全に徳性の成ることはできぬ。宗教心もまた然り。如來が神聖と正義との兩眼炯々と視玉ふ即ち嚴父の如くに見られ恩寵の愛々たる慈容を以て抱擁鞠養する如きは即ち愛に富む母の如くである。

神聖とは如來が衆生の行爲を照鑑し玉ふ智慧である。故に如來の神聖は道德律の根本である。法華經に如來衆生の行道と不行道とを知て度すべき所に隨て衆生を度すとは世の道德の最根源は宇宙大法の本然自爾の眞理にて一大天尊の行如來の徳性である故に道德の根本は何人も自分の都合に依て定めるものに非ず。故に神聖である。神聖侵す可らずとは天眞本然に定まりたる定期なり。地球が太陽を中心として循環する常則ありて逆轉も中止もできぬ。人の眼に視耳に聴く如き自然の則である如くに道德の秩序の理は定まつてをる故に神聖である。

### 三摩耶の花

世に百の花よりも殊に勝れて有ゆる花の中に獨り抜けて靈よく麗はしく覆はしきは人の心靈に開ける三昧の華である。扶桑第一櫻、今夜爲る君開、欲知二花眞意、三更踏月來、とは浦若き女史の心情の花である。そは薫はしきはかぐはしからんれ共、生理上に咲初る花なので雄蕊の蕭に刺激せられて薫を放つのである。

それとは殊に勝りてそれよりは遙かに優に其色の麗はしき香の妙しきものは心靈に開く花である。

如來の靈なる和氣に催されて咲き初る心靈の花は葵草のその如と何時でも一切に獨り超然たる天の一方に面を眞向に瞻仰して居る。然れども心靈の花は實に靈瑞花と

同じく容易に咲くものでない。誰しも其種を有ちながら、之を培養して無上の花を愛づるに至るものは稀である。けれども既に三昧の花が開くに先だちて、實に金剛石のやうな露の雫は、今に咲き初めんとする蕾に先づかゝるのである。其雫も矢張り天の使として彼よりは贈與せられたる愛である。心の花は毫も側眼を振らずして一に東天に昇りかゝる日輪の方に憧憬れて餘念がない。仄かに閃く一筋の光線は電の如くに今に東の幕を開かんとする前兆ではないかと怪しまる。白き蓮はいつ開くのであらう。蓮は日中でもなければ又薄くらく黄昏の頃でもない。日輪が東の清き海水にて麗面を洗ひながら圓かな容を仄かに現はしなざる其頃ほひに蓮の花は咲き初ぬ。東の方の葉が一枚パンと音を發しながら開きかけると、日の一すじの光は空を射る如くに本とうに可憐らしき咲初めた乙女の如きの花に。

### 感情美化の光

秋の時雨に遇ふ毎に潮々に如來の慈光に薰染して竟に滿紅の色を呈するに至りし。祖の内容甚深、暫らく感情美化の心相を見んか、彌陀のいと暖なる慈光に融合し麗はしき色は紅の楓、西に入る日の麗はしき紫にはふ赫耀と照りまばしき如くに輝くは身は此土ながら神は恢廓曠蕩十方に朗かなる樂土に在り。

神人融合の妙容は三昧妙樂不可思議、法喜、禪悅、愛樂佛法味、禪三昧爲食。佛法味に皮。教權文字の解義を以て喜悅の情を發すは、例せば佛法の眞如の理とは未だ了解せざりし、自ら切に解を求むるに一旦貫通する時は手の舞ひ足の踏むことを覺らざるまでに至る。

了解の上に喜悅を感ずるは皮膚にて深く悟達して手の舞ひ足の躍ることを覺らざるに至る如きは骨髓に達したるなり。尙萬有悉く法性の顯現、實相假○の現象として萬法と自己の見聞覺知として喜悅の材ならざるはなし。

自己が彌陀の心光に美化する時は自己が彌陀化して歡喜妙樂の彌陀の靈即ち自己の



心情より例へば青眼鏡をもて見る時は萬物悉く青色を呈する如く自己が中心真髓にして苦悶に沈淪する時は觸目歴線として皆懊惱の縁とならざるはなし。心順垂を充せば室内器物に至るまで嗔怒の縁ならざるはなし悲哀に沈む時は外境皆愁情の縁となる。外界の自己感情の現象たり。自己の真髓彌陀化する時は見聞覺觸として清淨微妙ならざるなし。即ち萬物光輝を放つて燦然たり。

カントが所謂、外境は自己觀念を外に觀るに外ならず、實體は吾人に過境たりとは全分の眞理とは見るべからざるも一面の眞理なり。自己が主觀を外界に觀るなり。唯識の一水四見また又一分の眞理なり。

猫の業識を以て人と猫と同室にあれども猫には猫の、人は人間の業識を以て外界を觀る時は人間の觀を出る能はず。彌陀の恩寵に薰染し久々にして純熟する時は自己の神識全く美化す。彌陀美化の心を以て見ゆる觸覺悉く清淨化する。是感覺美化の心相。

心情の美化歡喜妙樂

如來不可思議の靈光に融合し微妙神秘の快感の象相を表せば自然萬種伎樂其樂音法音にあらざるなく、清揚哀亮、微妙和雅、十方世界音聲の中最尊第一、

吾祖が常に琴笛の聲を聞きたまふとの、

また八功德池に神を調和冷煖自然に隨意開神悅體、蕩除塵垢、清明微潔、淨若無形寶沙映徹、無深照、微瀾迴流轉、灌注安祥、徐逝不遲不疾、波は無量自然の妙聲を揚げ其所要に隨ひ、但有自然快樂の音、三昧微妙樂、心情八風に動せられず。

日々の糧

我等は日々に二三萬の米果を糧として活けり。彼の稻の春芽發して苗となり夏は苗が繁茂して秋實を結ぶは好き果を結びて飽く米を收穫する處にあり。されば我等が日々に二三萬の米果を糧として稻草の如くに此身體を養ひて人間として萬物の長として

活くる所以は我等が靈的人格の實を結びて永遠の生命に靈に活くべき人格の果を結ぶ所の目的である。彼の稻の果を結ぶには太陽の光を被らざれば果は熟すべきに非ざる如く人の心靈はミオヤの光明を被るにあらざれば人格の靈化すべきに非ず。太陽の光に依て稻果の成熟する如くに我等が心靈はミオヤの光明を被りて靈化する、我等が人生の價値は此心靈に良き果を結ぶ所にある。

日々に如何に心を用ひて向上すべき。佛敎の願作佛心、願度生心、願作佛心とは人格を向上すべき願望、願度生心はすべてに恩寵を願ふ所以。

光明の中に自己を返照せよ願くは此光明の時間を聖意に稱ふやうに。

佛の大慈悲を念ぜよ

あなたが天地萬物の設備を以て我等を活かし玉ふ聖意により我等が此身の生活を爲すに就ては我等は日々に我等が糧となる米も一々皆生命なり。一々の生命即ち日々に二三萬の生命なる稻米は彼等犠牲と爲て我等が此身體を養ふ。我等は此の犠牲を享受して之に報ふことを能ふべきつとめあり哉を思惟する時は實に責任の重擔なるを感ず。彼等稻米果は自ら天のミオヤの御恵みを意識して此の廣大の恩を感謝すること能はず。されば我等が日々に二三萬の米を食するも至誠深心にミオヤの聖意に稱ふべき身の行爲と口の言語と意の思想とに於てミオヤの光榮を現はすべきやうに力め我等は此身を盡して彼の米果が我等に饑たる如くに我等はミオヤに饑けて仕へ奉らん。また此身を饑けて仕へまつる目的は我等が心靈に聖意に稱ふ人格の實を結びて永遠の生命と圓滿なる靈格を結びて終にはミオヤの許に詣でて觀音勢至文殊普賢等の諸の聖者の如くに盡未來際にまで聖意を世のすべての人々に知らしめてミオヤの光明の中に常恒に。

# 光明獲得

三六

實に天體は無窮である。また地上には一切の生物は無數に生存してゐる。天體は如何に無窮にても若し一つの太陽が無かつたならば、天は一切の生物の爲めに大なる力を以て生物を養ふことは出来ぬ。太陽は赫々たる威力を以て地球の如きの惑星に及ぼしてをるから萬物が生きて居ることが出来る。我等衆生の此の肉體的生命を養ひ下さる爲めには太陽が根本である。故に我等の生命は太陽の恵みと力とに依つて活かされて居る。此の肉體は太陽を中心として大威力を仰いで生きて居つても若し永遠の生命なる靈に活くるにあらざれば動物的生活に過ぎぬ。

我々の心靈を永遠の光明に生くる靈力を以て養成し下さるは彌陀無量光如來の光明のみである。無量光如來は靈界の太陽である。此心靈を清く潔く快活に圓滿に堅固に靈的に活かして下さるのは無量光如來の光明である。人が最も圓滿なる釋尊の如く靈的人格として永遠の生命として活きんと欲するものは彌陀無量光の光明に攝取せらるゝやうに一心に念佛すべきなり。

念佛は靈界の太陽なる如來の光明を獲得して光明に活きんが爲めなり。  
古來諸の聖者は皆な彌陀の光明によりて靈に活きる人なりき。彌陀は大光明常恒に照し玉ふ。

これを一心に念佛申せば其の光明に接せん。  
若し斯光明に接觸するにあらざれば念佛何の功かあらん。斯光に觸るゝものは靈に復活するなり。靈に復活したるのちの生活、身は娑婆に在れども神は彌陀光明中の人なり。  
たとひいかに智慧ありまた豊かなる生活するとも靈に活けるにあらざれば眞の價値なき生活なり。天の大ミオヤよりの賜の中に於て最も貴重なるは是時間なり。此自分と與へらるゝ光陰を無量光の中にますゝ光明中に向上するやうに心に常に念じてよかし。

三七

大正十四年五月二十日印刷  
同 廿五日發行  
誌代年七冊一圓二十錢(郵稅共)  
年十二冊二圓(郵稅共)  
編輯兼 山崎 辨成  
發行人  
東京市小石川區荻荷谷町九八  
印刷人 小林 七太郎  
東京市小石川區水道端二ノ四四  
發行所 ミオヤのひかち社  
攝警東京六八五一番